

南相馬からの便り 9 子どもたちの明日、未来のために一緒に行動しませんか！

台風一過、ここ南相馬は朝晩の涼しさが秋の到来を告げています。津波と放射能に翻弄された大地は雑草で覆われ、美しい草原となって広がっています。高く澄んだ空と吹き渡る風の中に立つと、あれほどの災害に遭遇しながらも一時も歩みをとめず再生を続けている地球の鼓動が、はっきりと伝わってきます。

自然は生きています。ふるさとの大地は生きています。

原発の相次ぐ爆発で命からがら逃げたあの日から2年半が過ぎ、私たちの暮らしは次のステージを見つけ出せずに停滞ムードが漂い始めています。荒れたままの田畑、進まぬ除染、離れ離れになった家族、心が萎えて仕事に復帰できない人々、過酷な人手不足、身近な高齢者の方々の相次ぐ訃報、原発事故がもたらした負の現象は、数え上げたらきりがありません。それらすべてを内包し、時は移ろってゆきます。

そんな混沌の中でも、子どもたちは確実に成長しています。大人たちが悲嘆にくれている時、健気に励ましてくれたのは子どもたちでした。過酷な環境に閉じ込められた子どもたちは、それにもかかわらず、あふれるような笑顔を見せていました。その姿に生きる気力を取り戻し、未来を創る気持ちを起こした大人たちがいました。南相馬では、子どもたちの未来のためにという気持ちに突き動かされた人々のつながりが一つのエネルギーとなって「みんな共和国」という夢の空間が生まれ、現実には、高見公園という何もなかった広場に、たった1年でアスレチックや冒険遊びができる遊具を備えた、大人も子どもも自由に集えるみんなの広場が誕生したのです。「想いは実現する」ということは真実でした。(プロセスは南相馬からの便り7・8参照)

この活動は現在進行形でまだまだ続いています。志に賛同する全国の方々の応援をいただき、今年は、高見公園に、小さな子どもが安心して水遊びができる「じゃぶじゃぶ池」ができ、地元にいる子どもたちばかりでなく、久々にふるさとに戻ってきた子どもたちと家族の交流の場ともなり、心のオアシスとしてたくさんの笑顔と喜びを生み出しました。これは、保育園をやっているメロスの志から生まれたプロジェクトです。

また、みんな共和国のテーマソングをつくってくれたシンガーソングライターのナッポは南相馬&杉並トモダチプロジェクトを立ち上げ、両地区の子どもたちによるミュージカルを企画しました。「心と心の交流が一番！」というナッポの想いから生まれた「まんまる革命」と題したこのミュージカルは、半年にわたるレッスンで両地区の子どもだけでなく大人を巻き込んだ一大プロジェクトでしたが、9月15日に杉並の高円寺で上演され、入りきれない人たちが場外でスクリーンで観劇をするほどの大反響を呼び、流した汗と涙を100倍も上回る大きな感動を生み出しました。来年早々には地元南相馬で上演しようと燃えています。

このように、南相馬では内外の区別なく、地域に投げ込まれた「個人の想い」という小さな志が大きな波紋となって地元の人々を揺り動かし、ゆるやかな、でも、大きなうねりを創りだしています。

一方、この2年半の体験のなかで、とても気になることがあります。それは大人の生き方の姿勢です。私たちは自分が暮らす日本という国を、他人事のように批判していませんか？「国が、東電が」と繰り返す大人たちの怒りや嘆きの言葉が、それを側で聞き続ける子どもの人生観にどんな影響を与えているか思い巡らせたことがありますか？何気なく垂れ流す大人の愚痴が、子どもの心をスポイルしています。囲い込まれた子どもたちが「死ね」とか「呪い」などという言葉をつき出したという話を聞くと子どもたちの心に秘めた悲しみ、苦しみの大きさに胸がつぶれる思いに駆られます。親の言葉を一番ストレートに信じるのは子どもです。親を苦しめる者は子どもにとっては憎むべき敵です。大人の無自覚な言動が、将来、自分の国に敵意を持つ若者を作り出すことになるのではないかという危機感を募らせています。今の社会を作り出したのはわれわれ大人です。大人が悲観的にならず、希望を語るという姿勢を子どもに見せなかったら、子どもは自分の国の未来にどんなイメージを持てるのでしょうか。

25年前に、核の時代を生きる人間の心を予測して語ったジョアンナ・メーシーの「絶望こそが希望である」という言葉が甦っています。何事もない平穏な暮らしが続く中で「絶望」に取り憑かれた沢山の人がいる日本の社会。私たちは原発事故という嵐に晒され人間の原点を体験しました。人が人でいられるのは、どんな過酷な状態になっても生き続けようとする、体の底から湧き上がって来るエネルギーを持っているからではないでしょうか。悲しみ、絶望、その底に見えてきた一筋の光、それを言葉で表すとしたら、やはり「希望」です。

希望の象徴は子どもです。私たちは、絶望の中からも希望が生まれてくることを身を持って知りました。もしかしらこの地は「核の時代を生き抜く希望を紡ぎだす」という大きな使命を与えられたのかも知れないと思うようになりました。絶望の底に希望が隠れていることを知った今は、恐れずに絶望に目を凝らし、真実をみようとすることができるようになりました。南相馬ではそれを踏まえて新しいチャレンジをしようという志を持つ人たちが行動を始めています。

未来を創るのは大人の責任です。

未来というのは、遠い先のことではなく明日です。

一日一日のことです。

一日一日想いを持って暮らすことが未来をつくることになるのです。

それが、子どもたちの未来につながります。

原発事故に潰されず、それぞれの暮らしの場所で原発に左右されない新しい生き方を見付だす行動を始めようではありませんか。未来を見据えて、まず一歩、自分の足元から未来につながる行動を始めませんか。

子どもたちの明日、未来のために一緒に行動しませんか！

2013年10月10日

高橋美加子